

1. 一般社団法人日本病理学会役員選挙について(告示)

本学会の現役員(理事・監事)は、令和6年5月開催予定の定時社員総会をもって任期満了となります。

令和6年度/7年度役員は、本学会定款ならびに役員選挙関係諸規定に従い、学術評議員の選挙によって候補者を選出し、上記総会にて選任されることとなります。つきましては下記要領に従い、令和6年度/7年度役員選挙を実施いたします。

記

○選出方法:

役員選挙は区分ごとの立候補制とし、それぞれ定員を超える候補者がいる場合は、学術評議員による選挙(無記名オンライン投票)によって選出します。

○選出区分と定員: 理事20名, 監事2名

立候補希望者は下記選出区分ごとに立候補届を提出して下さい。なお、重複して立候補する事はできません。

選出区分1: 地方区選出理事 8名

- | | |
|-------------|-------------|
| 1-1 北海道支部 | 1名(支部長) |
| 1-2 東北支部 | 1名(支部長) |
| 1-3 関東支部 | 2名(内1名が支部長) |
| 1-4 中部支部 | 1名(支部長) |
| 1-5 近畿支部 | 1名(支部長) |
| 1-6 中国・四国支部 | 1名(支部長) |
| 1-7 九州・沖縄支部 | 1名(支部長) |

選出区分2: 全国区選出理事

(男女両性で構成するものとする) 11名

選出区分3: 口腔病理部会長兼全国区選出理事

(歯科医師免許証所有者) 1名

選出区分4: 監事 2名

○被選挙人(立候補)資格者:

役員は関連諸規定より「就任年度4月1日時点での年齢が満63歳以下の者とする。」となっており、今回は昭和35年(1960年)4月2日以降に生まれた正会員(学術評議員・一般会員)が被選挙人資格者となります。

○役員立候補者募集要領:

1. 立候補届と被選挙人名簿への登載:

次期役員選挙に立候補される方は、学会ホームページにログインし、まずご自身の登録内容が最新の情報に更新されているか確認して下さい。

(<https://member.pathology.or.jp/>)

特に被選挙人名簿に掲載されるご所属名は、会員システムに登録されている情報が反映されますのでご注意ください。その後、「選挙(立候補)」タブより立候補登録をしてください。被選挙人名簿に登録されます。

*立候補受付開始: 令和5年8月23日(水)

12時00分(正午)

*立候補受付締切: 令和5年9月6日(水)

11時59分(午前)

*各選挙区分において立候補者が定員に満たない場合は、受付期間を延長することがあります。その場合はHPに告示します。

*会員システムにて立候補を登録すると、すぐに登録完了のメールが配信されます。

2. 所信表明(必須):

会員システム上での立候補の際に、400字以内の所信をご記入ください。段落、インデント、改行、フォントや下線などによる強調は使えません(反映されません)。

*選挙管理委員会が必要と判断した場合は、修正をお願いすることがあります。

3. 被選挙人名簿及び所信表明の掲載は届出(登録)順とします。HPにも掲載予定です。

○選挙実施要領:

1. 選挙人(投票者)名簿の確定

立候補受付開始日(令和5年8月23日)に会員システムに登録されている学術評議員とします。

2. 投票期間

会員システムでの投票開始日(令和5年9月27日)に投票権のある学術評議員にメールで投票開始のお知らせを配信致します。該当するにもかかわらずメールが届かない場合は会員システムのご自身の登録を確認の上、事務局までご連絡下さい。

*投票開始: 令和5年9月27日(水)

12時00分(正午)

*投票締切: 令和5年10月10日(火)

23時59分

3. 開票

令和5年10月11日(水)結果は同日HPにて公表の予定

○その他:

1. 理事長候補者は、令和5年11月10日(金)に開催される秋期特別総会(久留米)の新役員候補者会にて決定の予定です。結果は令和5年11月13日(月)にHP等にて公表いたします。

2. 役員候補者に選出された場合、上記新役員候補者会へのご出席をお願いすることになります。ご予約いただけますよう、よろしくお願いいたします。

2. Pathology International 編集長 (editor) の募集について

英文誌“Pathology International”編集長の任期が年度末に満了となることにともない、令和6年度以降の編集長を下記の要領により募集いたします。応募、または推薦の書面を病理学会事務局までお送り下さい。

<応募要領>

- 1) 応募は自薦、他薦を問わないこと。
- 2) 応募者は、学術評議員である日本病理学会会員であること。
- 3) 応募者が自薦の場合は、氏名、所属機関、応募の要旨、自筆署名を、また他薦の場合は、推薦する候補

者名を記載した書面(書式は自由)をPDF電子媒体としてメールに添付するかたちで提出すること。

- 4) 任期は、令和6年4月1日より4年とすること。再任可であるが2期目以降は任期2年とすること。

- 5) 締め切りは、令和5年9月30日とすること。

<提出先>

一般社団法人日本病理学会

Pathology International 編集長公募受付係

E-mail: jsp-admin@umin.ac.jp

※本年度の公募よりデータでの提出となります。ご注意ください。

3. 学術集会における各賞受賞者講演・一般演題の発表内容について

現在、日本病理学会では、学術集会における各発表において「発表内容は原則として英語で作成」、「英語表記推奨」としており、日本語でのスライド作成・ポスター作成をされる発表者も少なくない状況ですが、コロナ禍を経て、各国との国際交流事業も徐々に復活してきております。

当日の発表については「英語または日本語での発表」のままとなりますが、発表時のスライド、ポスターについては英語での作成を推奨いたしますので、改めましてよろしくお願い申し上げます。

4. 「レジナビフェア 2023 in 東京」活動報告

病理医・研究医の育成とリクルート委員会の主要な活動の1つとして、コロナ後2回目として総勢12名【藤井・村岡(横浜市大)、大橋(東京医科歯科大)、上野(香川大)、沼倉(帝京大)、鍵谷(千葉大)、長嶋(東京女子医大)、谷野(旭川医大)、前田・豊國(名古屋大)、加藤・松平(病理学会事務局)】で、6月18日(日)レジナビフェア2023 in 東京(東京ビッグサイト)に参加した。十分なコロナ対策のもとに実施された。

病理医の医学生への認知度はかなり上がっており、13時以降、学生の訪問が途切れることはなかった。最終的には42名の医学部学生と研修医が、病理医に関する話を聞きにブースを訪問してくれた。今年も5年生が20名と最も多かった。男女比は19:23とほぼ同数であった。関東地区からの学生が多く、国公立と私立大学の医学生の割合はほぼ同じであった。

個別の相談がかなり多く、30分以上面談をしていた学生もいた。病理を専攻した場合の勤務時間や最終進路に関する柔軟性を強調して話をしている。今年も、女性病理医4名(谷野、沼倉、鍵谷、村岡の各先生)に参加していただき、女性の視点から細やかな対応をしていただいた。

今年はコロナ後2回目の対面開催で、レジナビ全体の出展や参加者はほぼコロナ前に戻ってきていた。当日お会いしたみなさん、数年後に病理学会総会でお会いしましょう。多くの若手医師に日本の将来の医学研究を病理の立場から背負ってほしいものです。業務後にささやかな反省会をおこない、若手リクルートの決意を新たにしました。





5. オーストリア病理学会参加記

国際医療福祉大学医学部 成田病院 病理診断科
小無田美菜

この度、日本病理学会とオーストリア病理学会の交流事業の一環として、オーストリア病理学会からの招聘で、2023年3月24日(金)～25日(土)に、オーストリアのウィーンで行われたオーストリア病理学会に参加してきましたので、ここにご報告いたします。

日本からは、筑波大学 松原大祐先生、滋賀医科大学 九嶋亮治先生、倉敷中央病院 能登原憲司先生、そして私の4人が参加しました。

まずトップバッターとして、松原大祐先生がオーストリア病理学会の前日に行われたオーストリア病理学会・IAP主催の肺病理ワーキンググループミーティングにおいて、“What is YAP1-positive HGNEC?”のタイトルで35分の講演をされました(写真1)。ストーリー性のあるプレゼンテーションで、門外漢の私にも大変わかりやすいご発表で、活発な質疑応答がなされました。

続いてオーストリア病理学会と日本病理学会とのジョイントセッションにおいて、九嶋亮治先生が、“Gastric

dysplasia/adenoma in Helicobacter pylori naïve patients”, 能登原憲司先生が、“Histological diagnosis of autoimmune pancreatitis ;it’s not only a matter of IgG4.”そして私が“Tumour heterogeneity of primary liver cancers and its clinical relevance.”のタイトルで、各々20分の講演を行いました。

九嶋亮治先生は、ドイツのデュッセルドルフ大学へ留学されていたこともあり、流ちょうなドイツ語で笑いを取りながら、プレゼンテーションを始められ、聴衆の心はわしづかみ状態でした(写真2)。

能登原先生も、留学経験はアメリカだったにも関わらず、流暢なドイツ語でプレゼンを開始され(写真3)、英語のプレゼン準備しかしていなかった自分の未熟さを痛感しました。

九嶋先生、能登原先生のプレゼンは、診断のポイントが明確で、かつプレゼンで映し出される美しい病理写真の数々に、会場から、“schöne Fotos (綺麗な写真だわ～)”の声が聞かれました。オーストリアの病理医の先生方が、日本における病理診断の質の高さを再認識され、興味深く拝聴されている様子を拝見し、同じ日本人病理医として、誇らしく、とても嬉しい気持ちでいっぱいになりました。

国際交流は、学術だけにとどまらず、能登原先生と私は、土曜日の朝に行われた学会主催のマラソン大会にも参加し、オーストリア病理学会 President の Dr. Alexander Nader の導きで、近道なのかよくわからない坂道进行り、無事に完走する事ができました。足がつりそうになりましたが、証明書もいただき、現地オーストリアの病理医の先生方と触れ合う事ができ、良い思い出となりました（写真4）。

松原先生、九嶋先生、能登原先生のお名前は、学会や論文等で存じ上げていましたが、直接お会いするのははじめてでしたが、なんだか昔から知り合いだったかのようにとても仲良くさせて頂き、仕事だけでなく色んなお話しができて、大変楽しい時間を過ごす事ができ、とても充実した学会参加となりました。

また、オーストリア滞在中には、Graz 大学の Luka Brcic 先生に大変お世話になりました。Luka 先生は、クロアチアのご出身ですが、オーストリアに移住し Graz 大学で肺専門の病理医として診断、研究、教育に携わっています。秋期病理学会にも参加されるご予定なので、再会を楽しみにしています。

ここ数年、学会もオンライン開催が主体でしたが、今回現地へ赴き、色んな方々と直接お話しをして親交を深める事ができ、やはり face to face のコミュニケーションに勝るものはないな、と感じました。このような機会を与えて頂きました日本病理学会そしてオーストリア病理学会の関係各所の皆様に心より御礼を申し上げます。



写真 1



写真 4



写真 2



写真 3

6. 会員の訃報

以下の方がご逝去されました。

堤 啓 元学術評議員会（令和 5 年 4 月 1 日ご逝去）